



新年度ごあいさつ



病院事業管理者 丹野 弘晃 たんの ひろあき

キーワードは「生活」

高橋道長前院長が定年退官され、新院長として外科の杉田純一先生が就任しております。また副院長として、整形外科の板橋泰斗先生が加わっており、脳神経外科の鈴木直也先生、メンタルヘルス科の谷地森康二先生共々よろしくお願ひいたします。私自身は、現職を引き続き担当させていただきます。当院としては、新年度を迎え、医師の働き方改革・診療報酬トリプル改定に対応すべく、一丸となって取り組んでおります。

当院の医師の働き方改革については、地域医療提供体制確保の観点から、やむを得ず医師の長時間労働を前提とせざるを得ないため、特定労務管理対象医療機関（B水準）の指定を取得いたしました。この状況を一刻も早く改善するために、医師の労働時間短縮に向けた取り組みを進めていかなければなりません。病院組織全体としての方向性としては、医師はもちろんのこと全職員の「生活」を重視した運営が必須であると捉えております。

また、今回の診療報酬改定の骨子は、医療は「生活」の視点を重視し、介護・福祉は「生活」を基盤に据えながら医療の視点の継続を重視する、となっているようです。医療と介護の境目は、いよいよなくなってきたと実感しております。当院の具体的な対応としては、まずは高齢者救急と在宅医療をしっかりとやること、と考えております。第8次医療計画に、高齢者救急は第二次救急医療機関が主体となると明記されたことから、まさに当院の役割であると再認識したところです。地域住民の皆さんの高齢化が進展する中で、75歳以上の3割そして85歳以上ではその6割が要介護認定者となっています。おひとりでは通院できないご高齢の方が急変した場合は、当然救急車での受診となります。介護度を悪化させない迅速な診療と連携が、これまで以上に欠かせません。また、在宅医療については、附属とわだ診療所の存在が大きくなってきていると感じています。地域のニーズに応えるべく、診療機能の充実に努めていきたいと思ひます。更なる密度の濃い連携を、何とぞよろしくお願ひいたします。

表題に掲げたその心を、ご理解いただけたかと思ひます。「生活」という単語は、多義的で非常に多くの意味を含みますが、人間としての基本であらうと思ひます。当院とかかわるすべての皆さんの「生活」を意識しながら、今後の病院運営に努めて参ります。本年度もよろしくお願ひいたします。

新年度ごあいさつ



すぎ た じゅん いち
院長 杉 田 純 一

この度、高橋道長先生の後任として、十和田市立中央病院第八代目院長に就任しました杉田純一です。2002年に当院へ着任してから、早いもので22年の月日が流れました。ここで改めて自己紹介を披露いたします。出生地は、福島県いわき市です。十和田と同じ東北地方ですが、気候は段違いで、非常に温暖です。有名なスポットとしては、スパリゾートハワイアンズ、アクアマリンふくしま、いわき平競輪場（東北で2カ所だけ）などがあり、皆さんにも是非お勧めします。高校時代は尾崎豊をこよなく愛し、自宅の風呂で毎晩熱唱し、「俺はいったい何のために生きているんだ？」と自問している少年でした。その傍ら、SF小説、恋愛小説、推理小説と多読しましたが、中でも歴史小説が好きで、大学は京都府立医科大学に進みました。史跡巡りをして遠い過去に思いを馳せる大学生生活を夢見ていましたが、現実には華やかな都会生活にまみれ、現代社会をこよなく愛する田舎出身大学生ができあがりしました。順調に国家試験に合格した後、研修を経て、前当院事業管理者の松野正紀教授の第一外科（東北大学大学院消化器外科学分野）に入局しました。医学博士取得後、2002年4月より当院で勤務しています。

当院では、消化器外科医として胃癌、大腸癌の手術を中心に癌治療に携わってきました。腹腔鏡治療に関して、県内の他の病院よりも一早く取り組み市民の皆さんに提供してきました。手術治療だけでなく、日々進歩する抗がん剤治療に関してもエビデンスに基づき、青森、十和田の地域でも、仙台、東京に引けをとらない治療ができるよう心がけてきました。また乳癌治療に関しても、東北大学乳腺外科から応援を頂き、当地でも増加傾向の乳癌患者の診療を行ってきました。外科診療に関して十分な実績があると自負しております。

今後の当院を取り巻く医療環境は、少子高齢化、人口減少、医師の診療科偏在（医師不足ではなく）、病院に勤務する看護師、薬剤師の不足、診療報酬改定（実質マイナスと言う声も）などなど、決して追い風ではありませんが、新しく着任する医師、看護師、薬剤師や事務などのスタッフとともに、十和田市、上十三地区の医療をますます発展させることをお約束いたしますので、皆様方にはどうぞよろしく申し上げます。